

# 「読み聞かせ」に関する一考察

## － 言葉の発祥と普及 －

### A Study on “YOMIKIKASE”

#### － As for Origin and Spread of the Word －

栗岡洋美

Hiromi Kurioka

#### 要 約

本研究では、「読み聞かせ」という言葉の妥当性について判断するための手掛かりとして、その発祥について文献調査を実施した。その結果、1942年にその言葉の使用が確認された。さらに、「読み聞かせ」の普及について調査する中で、先人達が絵本と子どもを繋ぐ際に意識してきたことを読み取ることができた。

キーワード：読み聞かせ、絵本、子ども

#### I. はじめに

##### 1. 目的と方法

西暦2000年前後、筆者は、特に問題意識をもつことなく日常的に保育現場で「読み聞かせ」という言葉を使用していた。しかしここ数年、「読み聞かせ」という言葉について、子どもに対して強制的な印象をもつことから違和感を抱く人が増え、「読みがたり」「読み合い」など他の言葉が聞かれるようになった。確かに「読み聞かせ」の「せ」を「使役」の助動詞とすれば、強制的な印象を与えることは想像できるし、保育の計画や記録ではここ数年、「(子どもに)～させる」というような使役の表現を避ける傾向が見られる。

この言葉に着目した麦谷は、平安時代にはすでに「読み聞かせる」という動詞が使われていたと明らかにしている(2012, pp.4-5)。その要旨をまとめると、「聞かす」は「聞く」＋「す」で、その「す」には「使役」のほか

に「尊敬」の意味を強める場合もあり、現在の「読み聞かせ」が持つ強制的なイメージとはむしろ逆の「読み」＋「お聞かせする」であったということである。つまり当時は、頼まれた者が聞き手に敬意を表しながら和歌や物語を読むことを「読み聞かせる」という言葉で表現していたのである。

一方で、松山によって、「声を通じてその場にいる者が一つの物語を共有する(2010, p.79)」という視点において、1896年にはじまった口演童話が現代の「読み聞かせ」の行為につながることを示されているが、口演童話の中で「読み聞かせ」という言葉を用いていたことは松山の文献からも、その他の文献からも確認できない。また、張江・池田・安藤は、児童サービス論の今日的課題について述べる中で、「読み聞かせ」の生成史について触れており、「いつから現在使われているような『読み聞かせ』として成立したのか

について確定的な情報はない(2013, p.20)」と示している。このように、現在つかわれているその言葉の発祥については、充分明らかにされていない。

そこで本稿では、「読み聞かせ」という言葉の発祥と普及の経緯について新知見を得ることを目的とし、文献調査を実施する。そして、その結果を別の角度から検証するために、補助的にインタビュー調査を加える。インタビュー調査については、本学倫理審査会の承認を得ている。(審査番号25022号)

## 2. 絵本の定義

「広辞苑(新村, 1998)」で「えほん(絵本)」と引くと、「1, 挿絵のある書籍, 絵の本, 絵草紙 2, 絵の手本 3, 絵を主体とした児童用読み物」とある。また、香曾我部秀幸は絵本の基本概念について「絵本は、『絵(視覚表現)』と『詞(言語表現)』の異なる2つの要素が互いに調和結合した『本(書籍)』という形態を持つ表現メディアである(2002, p.380)」と示している。本論ではこれらを参考に、「視覚表現と言語表現が調和結合した本(挿絵の少ない児童向け書籍も含む)」とする。

## 3. 読み聞かせの定義

松山は、読み聞かせについて「大人が子供へ絵本の物語を聞かせる行為(2010, p.79)」と記している。本稿では、これを参考に、「大人が子どもへ絵本を用いてその話(内容)を聞かせる行為」とする。そして、現在「読み聞かせ」という言葉が使用されている場全てを想定し、絵本の種類(物語, 詩, 図鑑等)や読み手の立場(親, 保育者, 図書館司書等), 場所(家庭, 保育園, 学校等)を限定

せず広く捉えることにする。

## II. 結果

### 1. 口演童話と読み聞かせ

本稿の定義からいえば、口演童話は読み聞かせに当てはまらない。しかしながら、松山が語りの視点において、教員や母親によるボランティアの語りにつながるものとして口演童話の研究報告をしている(2010, pp.79-88)し、是澤も「子どもに語る大人たちの意識を明らかにしようとするならば、口演童話家たちの活動やその意識を視野に入れて探究する必要がある(2008, p.67)」と述べていることから、口演童話家の意識について触れておく。

口演童話の創始者である3名(松山, 2010, p.80)の口演の特徴より、彼らの意識について以下に述べる。

口演童話の第一人者である巖谷小波<sup>注1</sup>が小学校で初めて口演したのが1896(明治29)年のことである。巖谷は、「童話の聞かせ方」の中で「聞(聴)かせ方」という言葉をよくつかっており、相手に分からせ興味をもたせるように話すことを意識していたことを綴っている(1931)。つまり、聞き手である子どもを頭において働きかけている行為である。このことは、巖谷が創作した口演童話の題材となる「お伽噺」の教訓性について、松山が「目的は教訓ではなく『児童に面白く読ませる』ことだった(2010, p.80)」と記していることから分かる。以上のような巖谷の姿勢から、無理に聞かせるということではなく、聞き手を十分に意識したことによって“受け取らせる”という意味合いの、「聞かせ方」という言葉がつかわれていたことが推測できる。

次に2人目の久留島武彦<sup>注2</sup>について、波多野の解説（久留島・波多野，1973，pp.199-218）からまとめる。久留島は、数千人の子どもの心をとらえるために、身ぶりやその他のものをつけ加えて全身心を動員して、子どもの注意をこちらにひきつけようとした。また、子どもの発達段階を考え、年齢によって話し方を変えることや、子どもとのわかり合いを大切にし、話すだけではなく上手な聞き手になることなども強調していた。久留島が童話の語り方について講習会で話したものが記されている「童話術講話」には、「聞かせる」という言葉が何度も出てくるが、子どもに合わせた話し方を重視した久留島の姿勢から、“子どもが聞けるように”というこちらの勝負どころを強調した言い回しだったのではないかと推測できる。「心をもって心に語る。心をもって耳に語る。心をもって目に語る」という久留島の言葉からも、一方的に話すのではなく、“語り届ける”信念が感じられる。

3人目は岸辺福雄<sup>注3</sup>である。是澤によると、園長として幼児教育に携わっていた岸辺は、「全く児童になって話せ」と子どもらしくすることを重視し、幼い子どもにも分かる言葉と表現を大切にしていた。子どもの気持ちや状態に合わせて話すことを最重視していたということである（2008，pp.67-68，73）。

松山が「口演童話には、子供に有益な娯楽を提供することで道徳心を涵養し、生活を向上させる『社会教育』的な使命があったのである（2010，p.83）」と記しているように、口演童話は、明治半ばの失業や貧困などが増大した時代に、社会不安を払拭する目的を含んでいた。そのような背景や大衆向けの特殊な語り口ではあったものの、口演童話家が、

話の受け取り側である子ども達の状態に意識を向けながら話し方を研究していた姿勢は、おさえておきたい点である。

## 2. 「読み聞かせ」という言葉の発祥

### （1）文献より

口演童話は、大人が子どもへ話を聞かせる行為である点において、現在の読み聞かせに通じていたものの、その中で「読み聞かせ」という言葉はつかわれていなかった。その後の時代において調べを進めたところ、戦後絵本を論じた初めての書である（中川・吉田・石井他，2011，p.175）以下の2冊から、次の表現が見られた。

1966（昭和41）年に出版された「絵本と子ども」では、絵本と子どもの関わりについて語られているが、その中で（子どもに）「読んでやる」「絵本を与える」「教えてやる」という言葉が多くつかわれている。そして、「読み聞かせ」という言葉の記載も複数みられる。その中で中川は、章タイトルにも「絵本のあたえかた」という言葉を用いているものの、その内容の中では、「絵本を子どもに与える—ということだが、わりあい平気で使われていますし、わたし自身にしてもこれまでの何の抵抗感もなくそう書いてきましたが、ほんとうは、そんなふうにしてしまうと誤解されそうです。（中略）ほんとうは、親や教師が、子どもとともに、どのような絵本を求め、ともにどのようなたのしみ方をするか。こういうことが問題の中心でありたいと思っています（瀬田・中川・松居他，1966）。」と説いている。このことから、読み手と子どもと一緒に楽しむ姿勢を重視していたことが分かる。また、同書の中に瀬田貞二の「絵本の絵は、絵そのものがお話をしてく

れるような、そういう性質をたっぷりそなえていなければなりません。」という言葉があることから、目から聞かせる意味も含まれていると推測できる。

1967（昭和42）年に出版された「3歳から6歳までの絵本と童話（鳥越・森久保，1967）」でも、「読みきかせ」の記載が複数見られる。そして先と同様に「あたえかた」「話しきかせ」「語りきかせ」など別の表現も見られることから、当時はまだ定着した言葉がなく様々な表現がつかわれていたこと、そのなかに「読み聞かせ」という言葉も存在していたことが推測できる。また、この著書のなかでは「読み聞かせ」が「文学教育運動の一環としてさかんになってきた」ことに触れながら、読み聞かせの意義を「親の肉声をとおして、肌ごとまるごと本をたのしむということがなによりのよろこびなのです」と伝えている。

「物語絵本が質・量ともに急激に成長し、充実する時期が、戦後から1970年代のほぼ30年間である。背景には、優れた編集者たちの活躍があった（中川他，2011，p.174）」と記されているように、この2冊が出版された1960年代は、絵本出版界の動きが活発になり始め、少しずつ絵本が子どもにとって身近な存在になっていった時代である。

一方、同時期には、教師や母親が読書に関する様々な「読書運動」を展開し、日本の児童文学界も大きな節目を迎えた。1960（昭和35）年の椋鳩十による「母と子の20分間読書<sup>注4</sup>」や1967（昭和42）年の「日本子どもの本研究会<sup>注4</sup>」などが表立って知られている運動である。

「読み聞かせ」という言葉の発祥が「日本

子どもの本研究会」にあるという次のような報告が見られる。例えば麦谷は、日本子どもの本研究会の発足が絵本の普及に果たした貢献は多大であることに敬意を表しながら、「読み聞かせという言葉が生まれたのは（日本子どもの本研究会の設立年である）1967年とはっきりしている（2012，p.5）」と述べているし、櫻井もまた「1967年には日本子どもの本研究会，日本親子読書センター<sup>注4</sup>が設立され，これらはともに小学校教員が中心になって，新しい児童文学を広めるとともに本を読んで聞かせる活動を始めたものである。（中略）よみきかせということばは，このときからの造語（2005）」と示している。

「日本子どもの本研究会」の設立に寄与し、会長を12年間つとめた（張江他，2013，p.20）増村王子は，1973年に「読み聞かせの発見」の中で以下のように記している。「読みきかせということばは，何か上からの一方的な押しつけのにおいがあって，教育界に長い経歴をもつわたしには抵抗のあることばです。（略）しかし，気にしながらもこれにかわる適切なことばが見つからないままに，このしごとをつづけているうちに，読み手と聞き手の相互にえたものが意外に大きいことに気がつきました。」「読みきかせということばは，最初にだれがどのような意味で使い始めたかということは，明確ではありません。」

増村は同著の中で，場や読み手を選ばず「読み聞かせ」という言葉をつかっており，「わたしたちが読みきかせという場合，けっして上から下への一方通行であってはならないのです。」という言葉とともに，両者がひとつの世界を共有することを訴え，美しい日本語をきかせることの意義についても触れている。増村自身が知らないと言っているこ



とから、「日本子どもの本研究会」が発祥と  
 は言い難い。それは、その会が設立された5  
 年前の1962（昭和37）年に東京都小金井市  
 で開かれた日本文学教育連盟による第5回文学  
 教育研究全国集会において、小松崎進が  
 「文学教育としての読み聞かせ法」という報  
 告をしている（1998）ことから裏付けられ  
 る。「その頃のわたしの頭の中には、このこ  
 とばがあったわけですが、まだまだ一般的に  
 はなじみの薄いことばでした。」とのことであ  
 る。しかし小松崎は、1997年頃には、「ここ  
 数年来、このことばに若干の疑問をもつよう  
 になりました。」と、「読みがたり」という  
 言葉に移行し、立ち位置を変更している。

このように、読書運動が展開された時期に  
 「読み聞かせ」の言葉と行為に注目が及んだ  
 ことが分かるが、筆者の調べによると、その  
 20年ほど前にはすでに「読（讀）み聞かせ」  
 という言葉が存在し、つかわれていたことが  
 分かった。名詞での明示を確認できる最古の  
 資料は、1942（昭和17）年8月発行の「母  
 のため赤ちゃんばなし（上澤）」であり、「読  
 み聞かせばなし」「読み聞かせの材料」とい  
 う記載が見られる。この本は、母親が赤ちゃん  
 に話を聞かせるときに心がけたいことにつ  
 いて書かれた本で、母親が子どもに読む（話  
 を聞かせる）ことを勧めている。著者の上澤  
 謙二は児童文学者で、「子供之友」の編集や  
 幼稚園の運営にも関わっていた人物である。  
 上澤による1941（昭和16）年の「保育記録  
 園児と遊ぶ」から記載は見られなかった。ま  
 た著者は異なるが、1940年（昭和15）年  
 に「幼な兒へのお話（石森）」が発行されて  
 いる。母親が子にお話を聞かせることにつ  
 いて書かれている点で前掲書と似ているが、  
 こちらからも記載は見られなかった。

「読み聞かせる」という動詞の記載であれば、  
 白根孝之による1937（昭和12）年の「お馬  
 の話：幼児に読み聞かせる爲に」が存在す  
 る。内容は馬についての語りであり、絵本を  
 見せている様子はない。タイトルのみで見ら  
 れる。

その他、同時代に名詞での記載が見られる  
 ものを次に挙げる。

1951（昭和26）年に出版の「君ひとの子  
 の師であれば」においては、国分一太郎に  
 よって「読みきかせ」が複数回記載されてい  
 る。国分は、1957（昭和32）年に出版され  
 た「児童読物に関する100の質問（坪田・国  
 分）」の中でもこの言葉を用いている。この  
 著書では国分のほかに作家・評論家・出版関  
 係者・児童文学活動家・児童文化活動家な  
 ど児童文学者協会員73名が執筆しているが、  
 「読みきかせ」という言葉をつかっているの  
 は国分のみである。国分は、小学校教員、児  
 童文学者である。

1958（昭和33）年の「児童読物の読み聞  
 かせ方」においても、鴻巣良雄がタイトルや  
 小見出しで用いている。鴻巣も小学校教員で  
 ある。内容からは、子どもの心に送り届ける  
 ように読むという読み手（指導者）の姿勢が  
 うかがえる。

国分と鴻巣は、1956（昭和31）年に「子  
 どもの本棚」と「續子どもの本棚」の中で子  
 どもに推薦する書について執筆しているが、  
 共に「読み聞かせ」という表現は用いていない。

以上の結果から、1940～50年代には一部  
 の人によって「読み聞かせ」という言葉がつか  
 われていたことが分かった。ただ、つかっ  
 ていた人は、児童文学に関わる人の中でもごく  
 一部であったと考えられる。

神立幸子の「保育所・幼稚園における子ど

もの本の実態について」という1971（昭和46）年発表（調査等内容は1969年度のもの）の論文からは、保育者が「読み聞かせ」という言葉をアンケートの自由記述の中で自然に用いていることがうかがえる。回答した保育者のうち、約72%が東京都内の勤務者であり、残りの約28%は地方勤務者及び不明の者とのことである。この結果からは、保育現場でどれだけ使用されていたかを判断することはできないが、つかっている保育者が存在したということはいえる。さらにアンケートの中で、「家庭で読み聞かせ」という表現も見られる。しかし横田（2015）は、当時（「読み聞かせ」という言葉がつかわれ始めた頃）の状況を「多人数に本を読む為の特殊な手法で、（中略）家庭などで個別の子どもに読むのとは違うものである」と区別して、家で自分の子どもに絵本を読む時に、『読み聞かせ』という言い方はしなかった。2000年頃から、家庭で絵本を読むことも、『読み聞かせ』という言葉でマスコミが一般的に使うようになる」と述べている。これは、先述した増村の記載内容とも一致しない。家庭での「読み聞かせ」の歴史については、今後の課題とした。

## （2）松居氏へのインタビューより

「日本の絵本の興隆は、そのエディタリングによるところが大きい（中川他、2011, p.177）」と評される児童文学者・児童書編集者の松居直氏（以下、松居）に、インタビュー調査を実施した。松居が「こどものとも」の創刊を手がけたのは1956年のことである。これを「幼児を雑然としたモノシリにするよりも、人間としての骨組を作る絵本（松居、2013）」として世に送り出したことが

絵本出版界の躍進につながったことから、松居の子どもと絵本に対する思いを知ることは意義深いと考えられる。方法と結果は以下のとおりである。

方法：筆者より研究目的及び調査結果の使用について書面と口頭にて説明し、了承を得た上で平成27年3月に電話にて、及び同年4月に面談にて実施。

結果：一部抜粋して4点にまとめ、以下に記す。

①「読み聞かせ」という言葉の発祥について  
誰がとかいつからとかは知らないが、絵本と保育の関わりが深くなってきたときに出てきたのかもしれない。読んでやるということを読み聞かせと言っていた。特に園で読むようなことが「読み聞かせ」と言われたと思うが、実際のところは知らない。

②当時（1960年代～）の様々な読書活動について

子どもを教育しようという無理矢理のことについては賛成しない。子どもはもっと自然にすべきだと考える。ただ大人は読んでやればいい。

③絵本と子どもについて

絵本で何かを教えようとか知識や情報を与えようとか、そういうことは無しで大人は子どもと一緒に楽しめばよい。子どもと一緒に楽しむということが、子どもにとって一番大切なこと。絵本は教科書ではないのだから。耳から本当に豊かな楽しいおもしろい言葉をどんどん聞くことで言葉に対する感覚が育つと思う。言葉は耳で聞くべきなのでその意味で大人が読んでやるのが大切である。

④昔と今、これからについて

昔と比べるとものすごく変わった。絵本がこんなにたくさん出たというのは、好ま

しそうに見えるけれども、その中身がどういうふうになっているのか…。良い絵本は、耳から聞いている言葉以上に絵が語っているので、絵描きさんをどう選ぶかということは非常に大きな問題である。それと、読み手の言葉体験や言葉に対する感性が大切で、先生が言葉に対して自分の感性を本当に豊かにすると、理屈ではなくそれが子どもに伝わっていくと思う。

松居の話からは、「読んでやる」という言葉に込められた、子どもが豊かな言葉を耳から聞くことへの意識がうかがえる。大人が強制的な使役の意図をもって絵本を読むことについて否定し、子どもの自由で自然な感性を重んじていたのである。また、子どもに豊かな言葉を伝えるために、読み手の言葉に対する感性を重視していたことも興味深い。松居は著書の中で「絵本は子ども自身に読ませる本ではない。大人が子どもに読んでやる本である（松居，2003）」と絵本編集の方針を記しており、読み手と聴き手とが“共に居る”ことに絵本を「読んでやる」意味を見出している。松居は、大人に絵本を読んでもらい、言葉を共有したり楽しさを共感したりする絵本体験が子どもにとって大切であるという思いを、「読んでやる」という言葉で表現しているのである。一方で、「読み聞かせ」という言葉の出現については、松居の関与はないということであった。

### （3）広瀬氏へのインタビューより

1960年代の文庫普及活動に携わり、長年親子読書や図書館を通して子どもと本について活動을続けておられる広瀬恒子氏（以下、広瀬）にインタビュー調査を実施した。

広瀬は、家庭文庫・地域文庫の連合会として1970年につくられた親子読書地域文庫全国連絡会の代表を務めるなど、子どもと絵本がつながる場を当事者として見てきた人である。

方法：筆者より研究目的及び調査結果の使用について書面と口頭にて説明し、了承を得た上で平成28年11月に電話にて実施。

結果：一部抜粋してまとめ、以下に記す。

当時、世間一般には子どもの本についてまだ関心がなかったが、1950年の終わりから1960年代にかけて、日本の創作文学が出てきたことによって変わっていった。「だれも知らない小さな国（佐藤さとる，1959年）」を筆頭に、大人として読んでも共感できる作品が出てきた。しかし当時は全国に図書館が800ほどしかなかったので、子どもが読みたくても読めなかった。そこで文庫が増えていったという流れである。1960から70年代は“子ども達に本を”という動きが盛んになった。私は、「読み聞かせ」という言葉がこの動きの中でつかわれていたように思う。発祥については、日本子どもの本研究会よりも前に日本文学教育連盟の教育実践の中で自主的につかわれていた。日本子どもの本研究会が世の中に「読み聞かせ」という言葉を普及させたことは事実であると思うが、発祥となると私は違うと考えている。

広瀬の話から、「日本子どもの本研究会」の設立以前に、日本文学教育連盟のメンバーが、一部ではあるが個人的に、つかっていたということが示された。つまり、日本子どもの本研究会は、“発祥”ではなく“普及”というかたちで「読み聞かせ」という言葉に関

わっていたということである。「読み聞かせ」という言葉が“子どもと本とを結びつけたい”と願う人々によって、つかわれていったと考えられる。

### 3. 辞典に見られる「読み聞かせ」

“一般的”につかわれるようになったということの検証として、国語辞典に掲載されるようになった時期について調べた結果を次に示す。

最も古い記載は1982（昭和57）年2月に三省堂より発行された「三省堂国語辞典 第3版 見坊豪紀編」の中に見られる。「読み聞かせ」という言葉が単独で記されているのではなく、「読み聞かせる」という動詞の記載の中に「名 読み聞かせ」と記されている。「読み聞かせる」の意味は、「手紙や文章を読んで、相手に聞かせる」と書かれている。同第2版（1974年）には記載が見られない。1982年頃に出版された他の国語辞典には記載が見られないことから“一般的”とは言い難いかもしれないが、辞典において新語として選定されたことが確認された。単独での記載は、2009（平成21）年に岩波書店より発行された「岩波国語辞典 第7版 西尾実編」に見られ、「読（み）聞かせ：（子供に）本などを読んで聞かせること」と記されている。

### 4. 保育・教育における「読み聞かせ」の変遷と普及

#### （1）文献より

保育・教育現場では、「読み聞かせ」という言葉がどのように扱われていたのかを幼稚園教育の歴史と、教育要領・保育指針の変遷から示す。

1899（明治32）年に、はじめて幼稚園の綜合法規「幼稚園保育及設備規程」が公布され、保育項目4項目の中で「談話」という保育内容が確立された。幼稚園教育の中に、子どもにお話を語って聞かせることが位置づけられたのである。口演童話が誕生したのもちょうどこの頃である。この「談話」の実情について、是澤の報告（1999, 2002）より以下にまとめて記す。談話は、道徳心、観察力、言語力の3点を養うことを目的として保育に導入されただけではなく、当時の社会における望ましい忠義、奉公、義勇などを子ども達に示すことも合わせて目的としていた。また、「良妻賢母」という家庭教育の重要性をおす国の体制から、母親の「お話」がすぐれた教育手段となるということも説かれていた。

森上は、「当時の保育界をリードしていた東基吉の言う想像力は、実人生における『諸般の場合を想像する』にとどまり、子どもの世界における、イメージの広がり、想像の世界で遊ぶ楽しさを指摘するまでには至っていない（1984）」と分析している。是澤もまた、当時は子ども自身のイメージの広がりではなく、物語の世界を現実の世界に即して「正しく」理解することが重視されていたと指摘している。

そのような考え方に反し、子ども自身が自由に物語の世界をイメージし、「お話」を芸術的なものとして「味わう」ことを重視したのが倉橋惣三<sup>注5</sup>である。

しかし大橋が、「戦中の絵本や絵雑誌は、1938（昭和13）年の内務省通達の『指示要綱』によって、『教訓的』でなく『教育的』であること、『母の頁』を設け『読ませ方』『読んだ後の指導法』を『解説』することを義務づけられていた（2002, p.117）」と記してい



ることからも分かるように、戦争の影響を受けたことや「指示要綱」により様々な制限をされたことなどから、倉橋の思想のように子ども自身が自由に味わう時代はまだ来なかった。

戦後1948（昭和23）年の「保育要領」では、「お話」に関する文の中で「聞かせてやる」「知らせてやる」などの表現が何度も用いられている。一見すると目上の者が目下の者に一方的に与える印象が感じられるかもしれないが、「幼児に正しいことばを聞かせてやるのがたいせつである」「文字を通してではなく、話されることばを耳を通して学ぶのである」などの記載が見られ、以前よりも子どもを主体として考えられるようになってきた変化が感じられる。

その後、1956（昭和31）年に文部省から出された「幼稚園教育要領」で、保育内容が六領域に分類され、「言語」の領域で絵本の導入が明文化された。「言語」の望ましい体験として「絵本・紙しばい・劇・幻灯・映画などを楽しむ」と具体的に「絵本」と子どもの関わりの重要性が示されたのである。

1964（昭和39）年の「（第1次改訂）幼稚園教育要領」では、「～させる」という使役動詞が多くつかわれている。「保育者が子どもに～させる」という表現の言葉であると筆者によって解釈されたものが、46箇所見られた。1965（昭和40）年「保育所保育指針」の中にも数えきれないほど多くの使役動詞がつかわれており、当時は「～させる」という言語表現が頻繁につかわれていたことがうかがえる。

その後の1989（平成元）年「（第2次改訂）幼稚園教育要領」では、使役の表現が「発揮させる」「身につけさせる」の2つにまで減っ

た。1998（平成10）年「（第3次）幼稚園教育要領」では「発揮させる」「満足させる」の2つになり、この2つの表現は、行動の強制ではなく情緒の促進を意味していると捉えられる。2008（平成20）年「（第4次）幼稚園教育要領」でもこの2つの表現が引き継がれて記されている。

一方、保育指針の方は、1999（平成11）年「（第2次改訂）保育所保育指針」の中で「絵本や童話などを読み聞かせてもらい」など、多くの使役の表現が用いられている。それが、2008（平成20）年「（第3次改訂）保育所保育指針」には、使役の表現が全く見られなくなっている。

以上、国から通達される方針の変遷から、お話を味わうよりも正しく理解することを重視した考え方が、後に子どもを主体とした考え方に変わっていった流れがおさえられた。さらに、使役的な表現が通達文書から消えたのは、ごく最近の十数年前であることが分かった。保育指針から使役の表現が消えた時期と同時期に「読み聞かせ」という言葉に違和感をもつ人が表立ってきたことから、保育観の変容との関係性にも今後注目していきたい。

## （2）教員・保育者へのインタビューより

保育・教育現場での「読み聞かせ」について、戦後から長年保育・教育現場で教員として勤めてこられた3名にそれぞれインタビュー調査を実施した。筆者より研究目的及び調査結果の使用について書面と口頭にて説明し、了承を得た上で実施した。インタビューは、3名とも平成28年11～12月中に実施した。個人の特定を避けるために、地域や勤務年数の記載には幅をもたせてある。結果は一部抜粋してまとめて記す。



①元小学校教員・幼稚園教員（女性）

経歴：1958（昭和33）年より十数年間、東海地方の小学校に勤務。その後同地方の国立・公立幼稚園に十数年間勤務。教育委員会にも勤務。

戦後、中学生だった私は焼け残った本を一室に集めてみんなで図書室をつくり、そこで初めて活字らしい活字に出合った。活字に飢えている時代だったと思う。幼稚園に勤務するようになった1975（昭和50）年頃に、やっと園に絵本がたくさん置かれるようになった。

小学校では、童話を読解指導の教材として扱っていた。それから幼稚園に勤務するようになって子ども達に毎日絵本を読む中で、食い入るように話を聞く子や、感極まって泣き出す子がいて驚いた。子どもは心で受け取る。理屈ではないのだと思い知らされた。子ども達の様子から、「お話というものは、子どもの心を育てるのだな」と体感した。

私が幼稚園や小学校に勤務しているときは、「読み聞かせ」という言葉はまだなかった。「本（絵本）を読む」と言っていたと思う。退職後の平成9年頃には、私の中に「読み聞かせ」という言葉があった。子ども達に「読み聞かせ」をしたいと思って絵本を購入したので覚えている。読んで聞かせたい絵本や語って聞かせたいお話がまだまだたくさんあるので、今も、放課後に子ども達が集まる場で読んでいる。

②元保育士（女性）

経歴：1959（昭和34）年より30年近く、東海地方の公立・私立保育園に勤務。現在は、地域の図書館の管理に携わっている。

個人的な考えで、主任になった1977（昭

和52）年から親子読書を始め、園文庫を開いた。それまでも保育の中では毎日絵本を読んでいたが、子どもが借りることはしていなかった。当時は園に50冊くらいしか絵本がなかったので、始めは年長児だけ借りた。それから園で少しでも絵本を買うようにしたり自分が家に持っている絵本を入れたりして、冊数を増やしていった。個人的に絵本は子どもにとって大切なものだという思いがあったので、毎週月曜日に全園児に向けて童話を読むというようなこともしていた。私が小学3年生のときに担任の先生が毎日昼食後に本を読んでくれて、その記憶があるからかもしれない。「読み聞かせ」という言葉は保育の中でつかっていなかった。ここ最近公共の図書館の管理に携わるようになってからつかうようになった。

③元小学校教員（女性）

経歴：1949（昭和24）年より40年近く、東海地方の小学校に勤務。

1970（昭和45）年より前に勤めた学校には図書室はなく、教室に数冊本がある程度だった。その後に勤めた学校では図書室はあったが、校務員さんが司書の仕事も兼ねていた。昭和53年頃には、子ども達が図書室で本を借りていた記憶があるが、それまでは本の数は少なく、子どももあまり利用していなかったと思う。ただ、昭和40年頃からだと言うが毎日朝の会の中で10分、子ども達に本を読んでいたことを覚えている。例えば6年生を受けもったときには「ビルマの豎琴」を読んだ。読んであげたいと思って自主的に読んでいたのだが、他にもこのようなことをしていた先生はいたと思う。それについて「読み聞かせ」と言っていたということはない。退

職するまでは「読み聞かせ」という言葉を聞いたこともなかった。今は読書ボランティアの活動について「読み聞かせ」ということは知っている。

3名の話で共通していた内容は次の点であった。

- ・1970年代後半から、園や小学校で子どもが借りるほど絵本（本）が豊富になった。
- ・教育的な手段としてではなく、ただ、お話を聞かせたい、大人から読んでもらう経験をさせたいという気持ちから、自主的に読んでいた。
- ・現場では「読み聞かせ」という言葉はつかわれていなかった。（1990年代前半まで）

調査地域の偏りとデータ数の少なさから断言はできないが、このインタビュー結果と神立（1971）のアンケート結果により、教育・保育現場等において浸透した時期に、地域差があったと推測できる。

### Ⅲ. おわりに

今回の調査から、1942年の出版物において「読み聞かせ」という言葉の使用を見出し、新知見を示すことができた。そして、一部では教育的要素を強く含む動きがあったものの、子どもに絵本（お話）を届けることを目的としてきた口演童話家、絵本編集者、児童文学作家、教員、保育者らの足跡も示すことができた。

「読み聞かせ」は、子どもの心に、耳に、目に、届ける行為であり、そしてそこには読み手が共に楽しむ要素も含まれる。そのことを体得している者は、子どもの気持ちを無視した“強制的な関わり”だけでなく、“一方

的な関わり”についても違和感を抱くため、「読み聞かせ」という言葉からそれらが連想されることを危惧するのではないだろうか。確かに、『『文字・知識習得』という読み聞かせの結果として生じる外生的意義（藪中・吉田，2014）』を過剰に煽ることにもつながる、誤解を生じさせやすい言葉である。しかしながら、他の言葉に替えれば済むということではなく、子どもと絵本をつなげてきた先人達の「届ける意識」や「共に楽しむ意識」を理解し、それを受け継いでいくことが大切である。読み手の意識のあり方について、今後も引き続き考えていきたいと思う。

### 謝辞

本調査に御協力いただきました皆様に、厚く御礼を申し上げます。

注1：小説家、児童文学者としても数々の作品を執筆。「こがね丸」で近代日本児童文学史を開く。絵雑誌「幼年画報」「お伽画帖」，「日本一ノ画噺」によって絵本の近代を確立。（松山，2010；中川他，2011）

注2：巖谷と共に全国を行脚。海外でも口演。「お伽倶楽部」を結成（1906）し、ボーイスカウトを紹介（1911）。早蕨幼稚園を開園。（松山，2010；久米島記念館HP）

注3：東京府青山師範学校講師，東洋幼稚園園長などを務めた。童話団体「喃々会」を創設。童話の口演に関する最初の理論書「お伽噺仕方の理論と実際（1909）」を出版。（松山，2010；是澤，2008）

注4：いずれも、読書活動の普及と向上をはかるため、図書や実践の研究、読書環

境の整備等をする団体。

注5：東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事に就任（1917）。日本保育学会初代会長。（関口，2012）

#### 【文 献】

- 小さい仲間の会（1956.4）。子どもの本棚。三一書房。
- 小さい仲間の会（1956.10）。續子どもの本棚。三一書房。
- 張江洋直，池田裕子，安藤友晴（2013）。児童サービス論の現代的な課題。稚内北星学園大学紀要，No.13，7-42。
- 石森延男（1940）。幼な兒へのお話。横山書店。
- 巖谷小波（1931）。童話の聞かせ方。28-32，賢文館。
- 神立幸子（1971）。保育所・幼稚園における子どもの本の実態について。白梅学園短期大学紀要，No.7，63-100。
- 見坊豪紀（編）（1974）。三省堂国語辞典第2版。三省堂。
- 見坊豪紀（編）（1982）。三省堂国語辞典第3版。三省堂。
- 国分一太郎（1951）。君ひとの子の師であれば。東洋書館。
- 小松崎進（1998）。この本だいすき。284-286，高文研。
- 是澤優子（1999）。幼稚園教育における〈お話〉の位置づけに関する研究（その1）。東京家政大学研究紀要，No.39-1，79-88。
- 是澤優子（2002）。明治後期の家庭教育における〈お話〉観に関する一考察。東京家政大学研究紀要，No. 42-1，93-99。
- 是澤優子（2008）。子どもに語る「お話」の方法論に関する研究。東京家政大学研究紀要，No.48-1，67-74。
- 鴻巣良雄（1958）。児童読物の読み聞かせ方。児童心理 No.12 -5，487-493，金子書房。
- 香曾我部秀幸，大橋眞由美（2002）。日本の絵本史Ⅲ。鳥越信（編），ミネルヴァ書房。
- 久留島武彦，波多野完治（1973）。童話術講話。こぐま社。
- 久留島武彦記念館 HP（2020.5.1アクセス）  
<http://kurushimatakehiko.com/>
- 増村王子（1973）。読み聞かせの発見。160-203，岩崎書店。
- 松居直（2003）。絵本のよろこび。118，130，日本放送出版協会。
- 松居直（2013）。松居直と「こどものとも」。8，ミネルヴァ書房。
- 松山鮎子（2010）。口演童話の学校教育への普及過程。早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊，No.18-1，79-88。
- 森上史朗（1984）。児童中心主義の保育。75，教育出版。
- 麦谷貴子（2012）。読み聞かせという言葉を考える。おおしま絵本文化，No.18，4-5。
- 中川素子，吉田新一，石井光恵，佐藤博一（2011）。絵本の事典。174-177，朝倉書店。
- 西尾実（編）（2009）。岩波国語辞典第7版。岩波書店。
- 櫻井美紀（2005）。日本と海外，公教育の語りの授業。口承文藝研究 / 日本口承文藝学会編，No.28，96-101。
- 関口はつ江（2012）。保育の基礎を培う保育原理。73，萌文書林。
- 瀬田貞二，中川正文，松居直，渡辺茂男（1966）。絵本と子ども。53，177-179，福音館書店。
- 新村出（1998）。広辞苑第5版。岩波書店。
- 白根孝之（1937）。お馬の話：幼児に読み聞かせる為に。幼児の教育。日本幼稚園協會，No37-7，70-79。

- 鳥越信，森久保仙太郎（1967）． 3 歳から 6  
歳までの絵本と童話． 誠文堂新光社．
- 坪田譲治，国分一太郎（編）（1957）． 児童読  
物に関する 100 の質問． 155， 中央公論社．
- 上澤謙二（1941）． 保育記録 園児と遊ぶ．  
厚生閣．
- 上澤謙二（1942）． 母のため赤ちゃんばなし．  
厚生閣．
- 藪中征代，吉田佐治子（2014）． 子どもへの  
絵本の読み聞かせに対する親の考え． 聖徳  
大学研究紀要， No.25， 47-54．
- 横田重俊（2015）． ブックスタートの検証．  
絵本「BOOKEND」， 51-55．